■研究十二月往来＜128＞

静岡時代の観世清孝の演能記録

天野文雄

維新後の観世大夫清孝が慶喜に随って一時期静岡に退隠していたことは明治能楽史上よく知られた事件である。その期間は明治二年から同八年とされているが、その間の清孝の動静については、明治末年の『能楽』に掲載された夫人かつ子や嫡子清廉あるいは観世元規の回想によって、清孝は静岡本町の寺院に居住していたこと、静岡近辺で何度か興行をして大損をしたことがあることくらいしか分かっていない。古川久氏の『明治能楽史序説』でも、これらの回想記によって静岡退隠中の清孝の動静が記述されている。しかし、静岡時代の清孝の演能活動を伝える資料の存在は、早く野々村戒三氏の『能楽史話』(昭和19年)の「新城能の隆替」に報告されている。それは新城の天王社の祭礼で町民によって演じられた能・狂言の元文から昭和にいたる番組である。この番組は現在は新城狂言同好会の所蔵で、『日本庶民文化史料集成』第六巻に、祭礼の折にやはり町民によって演じられていた操りの記事が抜粋されているが、それはごく一部で、清孝の演能についての箇所は紹介されていない。また、昨年の十一月～十二月の国立能楽堂特別展示「新城の能装束」にはこの古能番組が展示されたようである。私はその展示は見ていないが、この番組については昨年の夏に新城で調査をする機会があって、その折に、静岡に退隠中の観世清孝が、明治六年に新城において催した二日間の能の番組をはじめて見ることができたのである。

「新城能の隆替」は新城市の平田彰氏の著になる『新城能楽乃栞』(昭和9年)に全面的によっており(野々村氏の付記)、野々村氏はこの番組を見ていないのであるが、新城狂言同好会の大原紋三郎氏のお話によると、能楽研究者でこの番組の調査に訪れたのは私が最初のようであった。その存在が知られていながら、この興味深い史料が半世紀も未紹介のままであったのは意外であるが、ともあれ二日間の番組を掲げてみる。

同年十二月十一日、十二日、駿河静岡兮観世大夫一座被参、二日興行仕候。

初日

観世清孝　高安七郎兵衛　観世権八
吉野天人　春藤六右衛門　大倉清蔵　山本政貴
間　伊藤玄中
安宅　清孝　延年之舞　六右衛門　春藤次郎兵衛　政貴
〃　大倉利三郎　下野岩太郎　玄中
張良　清孝　六右衛門　七郎兵衛　権八
〃　大倉六蔵　政貴　鍋嶌伊八郎
鳴子　伊八郎　岩太郎　玄中
川上座頭　岩太郎　伊八郎
以上

二日目

俊寛　清孝　六右衛門　次郎兵衛　政貴　利三郎
間　伊八郎
道成寺　清孝　六右衛門　次郎兵衛　権八
〃　六蔵　政貴　岩太郎　伊八郎
羅生門　吊本惟孝(ママ)(?)　春藤又太郎　七郎兵衛　権八　清蔵　政貴

〃　　玄中
鍋八撥　　伊八郎　岩太郎
木六駄　　岩太郎　伊八郎
　　玄中

以上

場所が記されていないが、祭礼能が演じられる富永神社の能舞台であろうか。シテは観世清孝、ワキは春藤六右衛門・同又太郎、笛は山本政貴、小鼓は大倉清蔵・同六蔵・同利三郎、大鼓は高安七郎兵衛・春藤次郎兵衛、太鼓は観世権八、狂言は伊藤玄中・下野岩太郎・鍋嶋伊八郎というメンバーであるが、清孝以外は東京から呼び寄せられた役者と思われる。観世清廉の回想記「給仕になる前後」に能興行のため東京から呼ばれた役者として挙げられている役者とつきあわせてみると、＊印の役者が一致する。旧幕時代の観世座の座衆は観世権八のみで、ほかは金春座付だった春藤・大倉、金剛座付だった高安、あるいは素人の下野、鍋嶋、伊藤（いずれも鷺流らしい）など、いかにも明治初期らしい役者構成である。演目にも明治時代の好みが反映している。

ところで、ここで演じられている《道成寺》については、清廉の「給仕になる前後」にある次の記述との関連が問題になる。

静岡を初めとして、浜松、新城其他諸所で能興行をやつたのです。…どこかで父が道成寺を勤めた時、鳥籠の大きいのを借りて来て、これへ何か切れをはつて鐘に使つたのだけは子供心にも妙な事だと思つて覚えてゐます。

《道成寺》の鐘がなく、観世大夫が鳥籠を代用したという愉快なエピソードである。清孝の所演でもあり、鳥籠の《道成寺》はこの明治六年の新城でのこととしてよいようにみえるのだが、そう断定するには一つ難点がある。それは、元文以来の能番組の伝存が示すように、演能が盛んであった新城に鐘の作り物がないはずはないからである。そうした理由から、最初は、鳥籠代用の《道成寺》は新城での能ではないと考えていた。しかし、念のために新城能の番組を繰ってみると、《道成寺》の上演記録はこの明治六年の清孝のものだけであることが判明した。新城で《道成寺》が演じられなかったのは技術的な理由からかとも思われるが、ともあれ、明治六年に新城に鐘の作り物がなかったことは確実であり、この《道成寺》が清廉の回想記にいう鳥籠の《道成寺》であったとしてさしつかえないように思う。

＊番組の紹介に高配をたまわった新城狂言同好会ならびに同会の大原紋三郎氏に感謝申しあげる。

（大阪大学文学部助教授）